

面倒が減った事実もそれなりに嬉しいが、何よりもそこまで帝人が自分を気にかけてくれるのが嬉しい。

帝人が来るようになってから、毎日が楽しいと思える。夜が待ち遠しくなった。しかも運がいいのかここ最近死ぬほど忌々しい男と会うこともない。最高だ。

今夜も仕事はやや早めに終わり、上機嫌で静雄は池袋の町を闊歩する。いつもならばまっすぐに帰宅するが、ふとコンビニエンスストアへと視線を向け、デザートでも買つて帰るか、という気になった。

申し訳なさそうに微笑を浮かべるか、それとも満面の笑みを見せるか。どちらだろう。どちらの表情も、静雄は好きだった。

申し訳ない、と思うのは自分に対して負い目があるからで、けれどその負い目は静雄に対して多少は好意があるからこそだろう。嫌いな相手には欠片も申し訳ない、などとは思わない。そう知っているから、その少しばかり憂いを帯びた表情で見上げられるのも悪い気分ではなかった。もちろん、満面の笑みも良い。

どちらの表情を帝人が浮かべても、静雄は彼の頭を撫でるだろう。そうして、彼はもう子どもじゃないんですよ、と少し不満そうに言ったり、苦笑して言ったりする。それらはすでに静雄の中で日常になりつつある。ひどく幸福で、かけがえのない、そんな日常に。

そう、気がつけば帝人は静雄にとってかけがえのない存在になっていた。

彼がいらない日々などもう考えられない。

自分がひどく彼に執着しているらしい、という自覚はすでに十分あった。この執着は何だろう、と思うことも、希にある。けれど深くは考えないことにしていた。

この感情の名前は未確認のままで良い、と静雄は思う。決意する。知れば面倒なことになったり、後悔するかもしれない。ならば、知らないままで良い。

(別に、知らなくても問題ねえしな)

そんなことよりも、この日々が続くことの方がよほど重要だ。叶うのなら、この日々が永遠であればいいとすら思う。永遠など存在しないと知っていても、それでも。

自嘲しつつ適当にデザートを買い込み、今度こそ家路を急ぐ。歩きながら、彼に今夜は泊まるように提案してみようかと思いつく。

明日は日曜日だし、静雄の出勤は昼過ぎだ。もしも帝人が領いてくれたなら、いつもよりも長い時間、一緒にいられる。最近、夜が楽しみになった一方で、帝人がアパートに戻る時間が来なければいいと思う自分がいた。

(いつそ同居とかできりやな)

今まで、家族以外と住んだことはないが、帝人ならおそらく、というか間違いない問題ないはずだ。自分を苛つかせないどころか、安寧をくれる少年。

だから、鍵を渡すことにも躊躇はなかった。本来、静雄は非道ではないにしろそこまでお人好しではないし、人をそこまで簡単に信用したりはしない。警戒心もある。